

これからのオルタナティブな教育支援において 求められるコミュニケーション要素の考察

中村 隆之

学校現場において不登校生徒が教育的課題となって久しい。文部科学省が平成30年に行った学校調査の結果では中学校生徒全体のおよそ4%が不登校である。

文部科学省含む公の定義では不登校とは「前年度間に30日以上欠席した長期欠席者のうち病気や経済的理由以外の何かしらの理由で登校しない、あるいはできない者」とされている（学校教育辞典、2014、教育出版株式会社 刊）。

現在、不登校の児童生徒は小中学校合計16万4千人に上る¹（平成30年度文部科学省『児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査』より）。しかし、この16万4千人を一概に「不登校」とまとめて扱うのは不適切ではないだろうか。不登校は古くは怠学（truancy）と一まとめにされてきたが、近年は多様に類型わけが試みられている。それは、多様性を求められる現代の教育現場において画一的な教育課程から脱落したものを不登校という大きなカテゴリに分類することに大きな意味はないからだろう。阿形恒秀（2019）は『月刊生徒指導 5月号』への寄稿コラムにおいて 注²

近年児童生徒を取り巻く状況は多様化・複雑化しており、学校教育も画一的なシステムでは児童生徒の多様なニーズに対応できなくなりつつあります（中略）「学校以外の場での学習活動の重要性」が指摘されたことは、深い意味があると思います。

と述べている。実際、不登校となった生徒を無理に登校させず、本人の性格・行動に沿って編成されたカリキュラムを用いたフリースクール・遠隔授業・家庭教師による家庭学習などの方法を用いることで、在学校での復学ではなく一つ先の学習段階で生徒が学校復帰したとする例も数こそ多くないものの実際に存在する。後述の神出学園を卒業した者などがそれに該当する。筆者自身も高等学校時代不登校を経験したがフリースクールと高卒認定試験という「学校以外の学習活動の場」を経て大学に進学した。このような、従来の学習課程とは異なる教育を表す「オルタナティブな教育」という呼称、またそれを行う、前述の学校以外の学習の場「オルタナティブ・スクール」という機関にも近年注目が寄せられ始めている。児童生徒の「より良い」発達を支援するためにはかならずしも学校へと復帰させる必要はないのではないかと、といった非画一性を重視した問いかけが重要となってきたのである。学校へは戻らずとも中学校卒業後、高等学校卒業程度認定資格を取得し職を得ることも、あるいは家から出ずとも在宅の職に就いたり、何かを製作したり、本人の関心のある事に積極的に取り組んだり、自らを社会の一員として認められるようになればそれは良い成長・発達だといえるのではないだろうか。学校以外の、オルタナティ

ぶな場で心身を養い、その後で改めて課程や社会に参画するというルートの整備が今後重要になってくるだろう。

例えば、鈴木敬子ほか(2011)³の調査で趣味(このケースではカメラ)が不登校児童生徒の人間関係や健康状態に良い影響を与えたとするものも存在する。また、兄井彰(2004)⁴の調査ではオリエンテーションやキャンプが児童生徒の自己有能感を喚起したという結果も認められる。これらに共通しているのは共同体験や自己肯定を促す経験等が「コミュニケーションの媒介となっている」という点である。他者とかかわる際の、いわば人と人との接点となる社会的要素が不登校児童生徒の自己肯定感・自己有能感・積極性の発達に関連づいていることが明らかになったのである。有田秀穂(2015)⁵は論文の中でスキンシップや他者との団欒が安心ホルモンとして知られているオキシトシンの視床下部からの分泌量が増えることを示している。また、このオキシトシンが分泌されれば老若男女の区別なく不安や緊張、鬱などストレスフルな気分を解消させ、遁走欲や恐怖心を抑制する結果も出ている。円滑なコミュニケーションが不登校児童の不安感抑制を促すのである。対人コミュニケーションは近年まではごく自然に行われていた行為故に、あまり意識的に行うものではなかったように思う。しかし、「コミュニケーション」という概念は近代化に伴い少しずつその在り方を変容させていき、現代日本においては半ば神格化されているといっても過言ではないほど重要視されている。重要視されすぎて、意識的・人為的にコミュニケーション能力を育もうと歪な協調性を子どもたちに植え付けることになり、結果その圧が子どもたちの自己肯定感を押しつぶしてしまっているように感じる。実際、上記平成30年度文部科学省調査において不登校中学生を対象とした不登校理由調査では「教師・友人との人間関係」を理由とした不登校が32.6パーセントも存在するのである。学校という現場で同調圧力・歪んだ協調性を受け入れられなかった児童生徒が本人の望む媒介を経て正しくコミュニケーションを知った結果前向きに発達・成長していくというのはある意味では当然の帰結なのかもしれない。しかし、コミュニケーションが有用だからと言ってオルタナティブな教育の場において、コミュニケーションの媒介を持たず他者受容の準備ができていない不登校児童生徒へコミュニケーションを強要してしまえば学校現場に蔓延している同調圧力の再生産になってしまう。あくまで児童生徒の自主性に任せたコミュニケーション養育を行うための場であることが求められているのだろう。

また、このオルタナティブな教育の場に近しい公的機関として適応指導教室というものも存在する。こちらは市の補導センターや市役所が組織・運営するオフィシャルに近いオルタナティブな教育の場、といった様相の施設である。オルタナティブな教育の場よりも「学校」に近いものといえる。実際、小中学校の敷地内に「相談所」という名目で開設されることも多い。両者において現在は共通して「下手に刺激せず、見守る教育」が重視されている。実際、無作法に内面へ踏み込んだ結果、不登校児童生徒やその関係者につらさを与える支援となってしまうことも少なくない。しかし、適応指導教室はオルタナティブな教育の場と違い公的な要素を持つため、結果を出すことが強く求められやすい風潮にある。そうなるとやはり功を焦り対応を誤るケースも出てきかねない。公的な支援施設はサポートが充実しやすい分、求められるハードルが高いことが今後壁になってくるかもしれない。

例外の典型事例として兵庫県のフリースクール「神出学園」が存在する。神出学園は形態こそ宿泊・寮生活型のフリースクールだが運営母体は県である。日本初の公立フリースクールである神出学園では「自尊感情を高める」「自信・勇気が持てる」「社会性を育む」を主軸として不登校・引きこもり支援を行っている（神出学園公式パンフレットより）特徴的なのは神出学園の基本方針となっている「学校を連想させない運営を行う」という考え方だ。先ほども述べたように公的な支援組織ではどうしても就労支援や学校復帰が主軸となりがちであるが、神出学園はあえて基本方針を学校から遠ざけることでオルタナティブな教育の場としての立場を明確にしているのである。神出学園のカリキュラムは陶芸や華道・茶道、手芸やアニマルセラピーなど一般的な学習とは少し違ったものが多く見られる。先述の「コミュニケーションの媒介」となりうる活動が非常に多いのである。また、寮は4人部屋をカーテンで区切った2人部屋×2を基本単位として構成されており、徐々に人に慣れていく造りとなっている。対人不安が強い場合は宿泊数を減らす、一日交流に留めるなど柔軟な対応も可能だ。一方で学校の教室を模した部屋もあり、希望する在籍生は学校に近い環境で自習を行いその成果を正式な高校の単位として認定される提携制度も存在する。あくまで個人の希望に沿ってコミュニケーションや学習能力を育てていく仕組みとなっているのだ。結果として、過去の総卒業生のうち約83%が社会復帰を遂げていることからこういったオルタナティブに近い支援を公的組織が行うというのは有効な一つの手段であると考えられる。ちなみにここでいう社会復帰とは「進学、就職を問わず進路を見つけ、そこへの参画に自己決定を下せるようになった状態」といえる。事実卒業後の進路として全日制高等学校への編入から大学受験、就職まで幅広い選択肢が存在している（H31.3.31調査 神出学園研修資料より）。

以上の事柄から、オルタナティブな教育の場において不登校児童生徒がコミュニケーションへの意欲を高めることは不登校状態脱却にある程度有用なことが再認識できたと思う。今後、さらに多様化していく不登校児童生徒への対応から、神出学園やフリースクールのような形態の支援組織の需要が高まると考えられる。

一方で、オルタナティブな教育支援では安定した学力という点で不登校児童生徒に不安が残る現状は大きく変えられない。高等学校卒業認定資格の取得試験は高校に三年間通った高校生より少ない知識量や学力でも取得できるし、その他の支援においてもやはり学力に重きを置いたものはコミュニケーションや個人の内面を尊重する支援方法とは方向性を異にするものであろう。そういった部分も含めて、今後も不登校児童生徒への支援について、ひいてはコミュニケーションについてさらなる実践的な検討が求められる必要があるだろう。

参考文献

- 阿形恒秀（2019）『月刊生徒指導 5月号「近年の不登校の課題と教育機会均等法」』学事出版5月号14頁-17頁
- 鈴木敬子，青木直和，小林裕幸『写真の力を利用した授業カリキュラムの開発』日本写真学会（2011）日本写真学会誌74巻2号77頁-91頁
- 兄井彰『キャンプ経験が不登校児童・生徒のコンピタンスと抑うつ傾向に及ぼす効果』日本生活体験学習

学会（2004）日本生活体験学習学会誌25頁-34頁

有田秀穂『スキップと団欒はオキシトシンを介してストレスを解消させる』国際生命情報科学会
（2015）国際生命情報科学会誌33号96頁

注

- 1 平成30年度文部科学省『児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査68頁図より
- 2 『月刊生徒指導』学事出版（2019）14頁14行目-15頁30行目より
- 3 鈴木敬子，青木直和，小林裕幸『写真の力を利用した授業カリキュラムの開発』日本写真学会（2011）
日本写真学会誌74巻2号77頁-91頁，89頁2行目より
- 4 兄井彰『キャンプ経験が不登校児童・生徒のコンピタンスと抑うつ傾向に及ぼす効果』日本生活体験
学習学会（2004）日本生活体験学習学会誌32頁80行目より
- 5 有田秀穂『スキップと団欒はオキシトシンを介してストレスを解消させる』国際生命情報科学会
（2015）国際生命情報科学会誌33号96頁5-10行目より